室町期上京土御門四丁町の形成過程

正会員 高橋 康夫*

はじめに

本稿は、宝徳4年(1452)の土御門四丁町の形態と構造をさらに深く解明するために、土御門四丁町の空間形成がどのようになされたかを考究するものである。

土御門四丁町は後述するように公家土御門家の相伝所領であり、しかも一円知行地であったから、空間形成の主要な要因は土御門家の土御門四丁町支配の様態に探られねばならないと考える。以下ではこのような視点から検討を進めたい。第1節では、土御門四丁町の伝領経過と、領主土御門家による土御門四丁町支配の様態を概述する。ついで第2節では、土御門四丁町支配における最大の問題に転化した「不知行在所」に焦点を合せ、その発生事情とその後の展開を詳しく述べる。以上の検討結果などを利用して、敷地と住人の変動を逐次追跡することによって、土御門四丁町の形成過程を具体的に観察し、考察する。

1 土御門四丁町の伝領と支配

まずはじめに土御門四丁町の伝領について言及しておく。土御門四丁町は、村上天皇第七皇子具平親王を祖とする村上源氏(中院・久我氏など)の一支流たる土御門家の代々相伝の敷地であったという。宝徳4年(1452)、土御門家はこの敷地を大徳寺塔頭如意庵に寄進するのであるが、その際に添付された土御門家敷地相伝系図では、

となっている。これは定冬(定具の子)の名を脱していることを除いて、「土御門家系図」³⁾とまったく一致する。

敷地伝領にかかわる土御門家のこうした主張は、通房の代以前については当否を判断する史料を欠くのである

が、源氏姓を賜った師房が土御門右大臣と号したのを始めとして、通親・通宗そして家祖定通がいずれもその称号に「土御門」を冠したこと⁴⁾、そして通親の屋敷が実際にこの土御門四丁町に所在した⁵⁾ことは土御門四丁町敷地伝領の事実を傍証するものである。土御門四丁町敷地が土御門家の代々相伝領有してきた敷地であることは、粉れもない事実といってよいであろう。なお、この敷地相伝系図自体は、実は室町幕府地方頭人摂津氏の裏封を得たものであり⁶⁾、記載事項の正当性が証明されている。つまり、当時、土御門四丁町が土御門家の相伝所領であることは、公認されていたのである。

さて、土御門家はどのように土御門四丁町支配を行っていたのであろうか。康応元年(1389)より前の史料がまったく伝存していない以上、平安・鎌倉期の様相は窺う術もないので、ここでは室町期——実際には康応元年(1389)から土御門家の断絶する宝徳4年(1452)までの六十数年間——における土地支配の一端を把握することにした。

土御門四丁町は、土御門家のいわゆる称号の地であったと同時に、現実に居住する敷地であって、「御所御敷地」とか、「土御門家境内」と称されていた⁷⁾。土御門家は土御門四丁町中央部に屋敷を構え、そして、周囲の道路——万里小路・土御門・富小路・正親町——に面した部分には少なからぬ百姓を置いて地子銭を收取していたのであり、日野家被官松波量世・酒屋式部房・酒屋越前俊意・豊屋三郎四郎・福聚寺宗薫(保寿庵敷地)・松皮屋彦三郎近国(土御門家被官)・坊城家雑色衛門九郎・宇足長賢・九郎二郎・馬淵近江入道道久・右衛門五郎、などの居たことが判明している(表—1 参照)。

これらの人々が土御門家から敷地使用を許可されるべき条件、つまり百姓たるべき条件は、たとえば松皮屋近国の請文に、

預申 土御門万里小路東頼御敷地事

合口 北 壱丈七尺、奥 壱拾丈、

右件御地子壱尺別五十文宛秋冬両度仁、可致其沙汰者也、若
有不法懈怠之儀、又御敷地御用有之由被仰下者、雖為何時、
不及一言子細、御地於可返上仕候、殊更為御被官人上者、不
可有緩怠之儀狀如件、

宝徳元年十月十七日

彦三郎
近 国(花押)⁸⁾

とあるように、① 地子銭両季尺別 50 文を納付すること、② 地子銭を納入できなかったとき、また土御門家

* 京都大学 助手

(昭和54年1月31日本稿受理・討論期限昭和55年1月末日)

が敷地返却を求めたときは、何時であろうと一言の不平を述べず返却に応ずること、の2個条であった。すなわち、領主の地子徴収権および百姓改易権に服従することが百姓としての条件となっていた。ただし、土御門家の意向によって地子銭の免除される場合もありえたことは、次の史料によって明らかである。

保寿庵之屋敷事、愚僧一期之間ハ、地利可有御免許之由蒙仰候、恐悦千万此事候、以後事ハ、御本所様の可為御成敗候、猶々地利事、於生前御芳恩難忘存候、誠懼誠惶敬白、

「文安六」(異筆)

六月一日

宗蕙(花押)

土御門殿

御奉行中⁹⁾

すなわち、宝寿庵跡地を借り請けた福寿寺宗蕙は、その生涯にわたって地子銭(約1貫500文と推定される)を免除されることになったのである。

ところで、土御門家は、この土御門四丁町の百姓が室町幕府の臨時課役に対して一定の免除を享受しうるように策動したことも指摘しておかねばならない。史料上判明するかぎりでも、応永25年(1418)の鴨社造営地口役、応永26年(1419)の愛宕社造営地口役、正長2年(1429)の地口役、永享7年(1435)の神祇官造営地口役、宝徳3年(1451)の鴨社造営地口役と、五度の地口銭賦課を免除されている(表-2 参照)が、それは土御門家が領主として地口銭¹⁰⁾免除敷地注文を作成し、その免除を幕府に申請したからにほかならない。宝徳3年(1451)の場合の敷地注文は、

土御門中將家雜掌申鴨社造営地口役之事、於境内之百姓等者、先規不致其沙汰候、
證文
備右、

丈数

土御門面 ^北	半町
富少路面 ^西	十一丈五尺余
正親町面 ^南	四丈余
万里少路面 ^東	自家門通路 南半町

右、除不知行并被官人居住之地定、早可止催足之由、可預御成敗状如件、

宝徳三年七月十日¹¹⁾

であり、不知行地と被官人居住地を除外した地口丈数が掲載されている。つまり、敷地注文は一般百姓の敷地間口を書きあげたものであり、したがって、各類の地口総丈数が判明するならば土御門四丁町における当知行と不知行、被官人と一般百姓の割合をみる史料として行うことができる(第3節)。なお、被官人とは土御門家被官人の意であろうが、敷地注文においては、臨時課役免除の特権をもつ百姓も、同じカテゴリーに含まれていたとみてよいであろう。それはさておいて、この敷地注文をうけて幕府は、

此在所地口事、可被止催足之由候也、仍執達如件、

宝徳三

七月十三日

(飯尾為種)

永

祥(花押)

(布施)

貞基(花押)

佐々木隠岐入道殿¹²⁾

という幕府奉行人連署外題によって地口銭免除を認めている。この場合、免除の理由には言及していないけれども土御門四丁町がまさに土御門家の居住敷地であったからこそ地口銭免除を認められたのであることは、たとえば、次に掲げる応永25年(1418)の鴨社造営地口役免状に、

土御門殿御地事、万里少路半町・土御門面壹町・富小路半町、為御所御敷地上者、鴨造営地口役可止其責候也、仍状如件、

応永廿五年五月九日

奉行(花押)

地口使者中¹³⁾

(傍点筆者)

とあることから容易に知ることができよう。

以上、土御門四丁町支配の様態を概述してきた。土御門家の百姓支配は、二つの領主的権限——地子徴収権と百姓改易権——と、臨時課役(地口役)免除の特典恵与との上に築かれていたといつてよいが、現実には土地経営を全うするためには領主的権限が強権として百姓に作用するだけでは不十分である。土御門四丁町を他からの干渉・介入がなく、直接支配しうることが肝要であり、そうであってこそ土御門家は、その経営方針に則って、土御門四丁町の空間形成——敷地規模・形状の変更、街区・内道路の新設・撤廃、地割の更新、身分や職業また土御門家との関係による百姓規制など——を行なうことができるのである。

ところで、康応—宝徳期においては室町幕府権力が強大であったがゆえに、その闕所検断権によって領主的権限も保障されていた。しかし、土地支配権は逆にそれゆえに侵犯されやすい情勢であったに違いない。実際、公・武・寺社など諸権門が、その時々幕府との政治的・社会的関係を利用して、つまり幕府の勢威を背景として、領主の土地支配にしばしば介入したことは否定しえない事実であるし、この「土御門屋地文書」の中にも、そうした事実を示す史料が少なからず残存している。

さて、土御門家の土地支配権が不可侵性を備えていなかったとするならば、土御門四丁町の空間形成過程を検討するに先立って、土御門家が土御門四丁町をどの程度、掌握していたかを究明しておく必要がある。そこで、節を改めて、土御門四丁町支配に対する外部の介入の実態を詳細に検討したい。

2 不知行在所の発生と展開

土御門家による土御門四丁町支配は、残存する最も古い文書(後掲)が支配に対する介入を示している通り、平穏無事であったわけではない。ここでは、とくに不知行在所——土御門家の支配しえなくなった敷地——について考察するが、それは、土地支配あるいは土地所有に

かかわる問題であるからという以上に、都市空間の変容を惹起せしめるような契機が、そこに潜んでいる可能性があると考えからである¹⁴⁾。

まず、次の史料をみることにしたい。これは、宝徳4年(1452)にこの土地を如意庵に寄進した直後に差出された土御門宗端(定長)書状案である。

寄進申候敷地之内、不知行在所之事

(小)
一正親町万里少路角四半町者、康応元年七月、日野東洞院被
(量世) 官人松波、無理致押領候了、而齊藤因幡守(祐定) 入道買得
云々、依為家門旧跡、因州返付候キ、雖然當時致斟酌、不
(訟)
及訴詔候、万一有御縁者、可然之様、可有御了簡候哉、
一正親町富少路角不知行之地者、依借錢、寄事於左右押領
候、彼借状之案并目安古案等進置候、同次之時、可然之様、
可有御訴詔候哉、条々為御意得、只今委細申候、恐惶敬白、

(土御門定長)
宗 端 (花押)

五月十二日

如意庵
侍衣禪師¹⁵⁾

土御門四丁町内の不知行在所に関するこの書状案は、不知行在所の発生した事情を、その一斑にしか過ぎないとしても、物語っている点で重要である。以下、この土御門宗端書状案を手掛りとして、不知行在所二ヶ所の発生と展開、そして、両者の相違点を究明したい。

(1) 正親町万里小路角四半町の場合

前掲した土御門宗端書状案では、宗端は、康応元年(1389)7月にただ松波量世が無理に敷地を押領したと記すのみであって、その原因・理由・事情などをまったく説明していないように見える。だが、そこでその松波をことさらに「日野東洞院被官人」と書いていることを見過ごしてはならないであろう。

「日野東洞院」とは一条東洞院に邸を構えていた日野資教のことであって、康応元年(1389)当時34才、従二位権中納言であった。この資教について注目しているのは、その姻戚関係である。日野家はふつう室町將軍家と代々縁を結び、勢威を振ったことで知られているが、その端緒は資教の姉業子が三代將軍義満の室となったことであつた。この姻戚関係によって日野資康・資教の兄弟は権勢を欲しいままにするに至る。近衛道嗣の日記である『愚管記』永和4年(1378)3月9日条に、

(義満)
今日資教招請大樹并室家^{資教}云々、近日権勢傍若無人歟、

とあり、また広橋兼宣の日記『兼宣公記』康応元年(1389)正月6日条にも、

(高倉)(日野)
管領并永行・重光(資康の子)三人一級事、自室町殿御執奏、各被宣下之由奉及云々、重光避夕郎叙四品也、驚存者也、余者自重光上首也、夕郎相並之輩將以超越之条、為之
(日野) 如何、令周章者也、但資康卿者、越俊任・経重等令昇進畢、近日依武威振権勢、何輩可相争哉、無力事不限一身者哉、
(坊城)(勸修寺)

とあるように、当代切つての権門勢家であったと言えよう。

ここで問題の敷地の規模が四半町(方20丈)と大規模であること(領主たる土御門家の屋敷規模をわずかにしたまわる)、そしてこのような場合簡単には百姓となりえないことなどを合せ考えるならば、土御門家と松波との関係が通常の領主―百姓といった直接的な関係でなかったであろうことは容易に推察される。そこにはおそらく日野資教が介在していたに違いない。ところで、ここに次のような某書状がある。

(礼紙切封ウハ書)
「土御門殿(定具) — (花押)」

御地事、巨細承候了、時世参申候欵、更不可有物怠之儀候、雜舍御井などハ不可繕申之段勿論候、竹ハちと可被切候欵、其も可為御意候間、可申談之由申候了、武者巨細可被申候、可有御談合候、御地事、昨夕以誓文申候了、定不可有御不審候欵、更一言も為下不申出事候、其分期面候、恐惶謹言、

「康応元年」(異筆)

七月廿八日

(花押)¹⁶⁾

充所の「土御門殿」を、『大徳寺文書』の校訂者は有世と注するが、土御門を家名とする家は、藤原氏と安倍氏と村上源氏の三流があつていつも簡単に決しようとはかぎらない。この場合も藤原保光と安倍有世と源定具の両者が比定されるけれど、明確な決定根拠を欠いている(差出人が決めてとなろうが、この花押の主は不明とされている)。しかしながら、藤原保光や安倍有世宛の書状が大徳寺に襲蔵されてきたとするのは、とくに関連史料もみあたらない今の場合、伝来の上でいかにも唐突・奇異な感がある。この充所の「土御門殿」は、したがって、土御門定具と解する方がより妥当であろう¹⁷⁾。

次に、この某書状の充所・日付そして内容をみてみると、前掲土御門宗端書状案の正親町万里小路角不知行在所の記述と偶然とは思えないほどに一致していると言うことができる。双方の関連は疑い得ないであろう。というよりも、不知行在所発生事情を、この某書状は物語っていると考えられる。そして、この書状の差出人こそ、ほかならぬ「日野東洞院」=日野資教と比定されてよい(この書状の書式がかなり薄礼であるのは権門勢家たる資教の立場を如実に反映しているとみられる)。

以上のように解するならば、この書状から第一に、土御門四丁町内の四半町敷地は日野資教が誓文によって借りたこと、第二に、実際に敷地を利用するのは日野資教ではなく、「武者」=松波量世であること、第三に、敷地を貸したがゆえに、土御門家屋敷は、その変容もよぎなくされたいこと、などの諸事情が判明するのである。

義満の姻戚たる立場を利用して強引に土御門四丁町内の敷地を借りうけた日野資教は、その敷地を自分の被官

松波量世に居住させた。権門被官としておそらく居屋敷地子錢を免除されていた松波はもちろん土御門家に地子錢を納めなかったに違いない。というよりも、後に知られることであるが、松波は、この敷地を資教から拝領したもの、すなわち「私領」と考えていたから、百姓として地子錢を納める義務など念頭になかったと断じてよい。そこで、領主土御門家との間に紛争が生じるのは当然の推移であろうが、永享3年(1431)松波はこの敷地を齊藤因幡守祐定に売却することによって現実の、あるいは将来の相論から身をおとしたとみられる。

沽却 屋地事

合宅所者、正親町万里小路東頼
貳拾丈四方

右件屋地者、雖為私領、直錢貳拾貫文、相副本文書、限永代沽却申處也、更以不可有他妨者也、仍為後日狀如件、

永享參年十一月廿八日 松波 量世(花押)

齊藤因幡守殿¹⁸⁾

この松波量世屋地売券には、松波が問題の敷地を「私領」と称していたこととは別に、なお興味深い事実がある。それは20丈四方の敷地が直錢20貫文で売買されたことである。すなわちこの敷地価格は平方丈あたり50文の単価であった。しかるに、当時(永享年間)の土御門四丁町敷地の地子錢は両季尺別50文、すなわち平方丈あたり50文と考えてよい¹⁹⁾から、さきの売買金額は一年間の地代と同額ということになる。したがって、齊藤因幡守祐定は、百姓として負担すべき一年分の地子錢と同額という僅少な出費によって、敷地を所有することができたのである。問題はただ、本来の領主である土御門家との相論が生じたときそれに対処しなければならないことであろう。

齊藤祐定はその後10年間にわたって知行を継続したが、嘉吉元年(1441)どういう理由・事情からか、土御門家に敷地を返却している。

(捻封ウハ書)

「りやうけうの御房 祐定」

御地返申候、此由在所大さまちまて
のこうち四半町、土御門殿様へ可有御申候、
恐々謹言、

(異筆)
「嘉吉」七月五日

祐定(花押)²⁰⁾

前掲の土御門宗端書状案によると、この返進は「家門旧跡」であることが認められたからということであるが、しかし、それはただ形式的に所有権を返付したに過ぎないようであり、齊藤祐定は相変らず敷地を占有・使用し続けた。同じ書状案にうかがわれるように、土御門家に地子が納入されるような状況ではなかったから、依然として不知行在所のままであった。こうした奇異な状況は、実質的には康正3年(1457)に土御門四丁町が開発されてその敷地割・住人構成とも面目を一新する²¹⁾まで、また形式的には文明12年(1480)に齊藤祐定の

子である徳齊が、

寄進 敷地事

合宅所者、在所正親町万里小路
南西頼、貳拾丈四方

右敷地者、亡父祐定庵主令買得、雖為知行、為七世父母二親得脱、相副本文書三通令寄進訖、於子々孫々不可有違乱煩者也、仍為後日所令寄進之狀如件、

文明十二年庚子十二月廿日 沙弥徳齊(花押)²²⁾

と如意庵に「寄進」するまで存続したのである。

(2) 正親町富小路角敷地2筆の場合

まず、すみ酒屋用途借用状案をみる必要がある。

借申 用途事

合貳貫文者

右件用途者、毎月貫別二、五十丈宛之利分を加て、明年乙酉八月中ニ可返弁申候、若約束之月過候ハ、正親町富小路西頼すミ二間之分、口四丈二尺奥十丈、又正親町面、口一丈一尺おくゑ拾丈、此状おうりけんとして、永代取なかされ、知行せられ申候へく候、其時一言の子細お申ししく候、仍為後日狀如件、

応永十一年正月 日²³⁾

これによると、応永11年(1404)正月、土御門家は正親町富小路角敷地(2筆)を担保として、酒屋式部房(この敷地の百姓である)から2貫文の錢を借りた²⁴⁾。そして万一翌応永12年(1405)8月までに借金を返済することができなければ、この用途借用状をそのまま屋地売券として担保の敷地を取りながし、錢主式部房のものとするという契約を交わしたのであった。それから20ヶ月経って約束の期日が過ぎ去ったとき、式部房は借金が返済されなかったとして担保の敷地を押収知行した。

しかしながら、土御門家はこの間の事情についてまったく違った見解を表明している。土御門家の主張を聞くとともに、紛争のその後の経過をうかがうため、ここで長文にわたるが、応永19年(1412)7月および8月の土御門家雜掌申状案2通を引用する。

土御門家雜掌申

(小)
敷地内正親町富小路角 口四丈二尺 奥十丈
口四丈一尺 奥十丈

右敷地者、代々相伝地也、爰依計会、付地百姓・家僕預置処、向此地之百姓式部房、指約月新足令借用処、毎度号他行不請取、約月過号流失、於地子等不及沙汰間、就地御奉行申披子細間、去応永十五年十二月廿日、以公人被打渡、

(被)
致知行処、号富樫彼管人錢主不随所勘、今又畠山殿彼管人山下錢主令契約、式部房無窮付錢主不随所勘、所詮、重以公人被打渡、為全管領、粗言上如件、

応永十九年七月 日²⁵⁾

土御門家雜掌申

(小)
敷地内正親町富小路角

右敷地者、代々相伝地也、爰依計会、付地百姓・家僕預置処、向此地之百姓式部房、指約月新足令借用早、但約月中地子又彼現錢返遣、可散用之由被仰処、毎度号他行不請取、約月過号流失、於地子等不及沙汰間、付治部河内守、申披子細処、去応永十五年十二月廿日、以公人被打渡、致知行

処、号富樫彼管人錢主不随所勘、今又号鷹栖錢主令契約、式部房無窮付替錢主、更以不随所勘、所詮、重以公人被打渡、為全知行、粗言上如件、

(応)

□ 永十九年八月 日²⁶⁾

土御門家の説明によると、この間の事情は次のようになる。土御門家は約月に元利ともに借金を返済し貸借関係を清算しようと努めたが、しかし式部房はいつも外出中であると称して返済金を受納しようとはしなかった。それにもかかわらず、式部房は約月が過ぎたから担保の敷地は流れたといて、土御門家に地子金を支払わなくなった。そこで、土御門家では室町幕府地奉行治部河内守に訴えた。その主張は幕府に容認され、応永 15 年(1408) 12 月 20 日、公人によって敷地が打渡され、土御門家がもとどおり知行することになった。ところが、このとき酒屋式部房は、錢主はもう自分ではなく、富樫被官人であるといつて裁定に従わず²⁷⁾、その後応永 19 年(1412)に至っても、畠山被官人山下、ついで鷹栖へと錢主を次々に付け替えていこうに裁定に服そうとしなかったため、土御門家は重ねて公人によって打渡され、知行を全うできるように幕府へ請願したのであった。要するに、錢主式部房の奸計によって奪い取られた敷地が返還されるように善処してほしい、というのが土御門家の意向であった。

しかしながらよく考えてみると、奸策によって式部房が奪ったとする土御門家の主張には二、三の疑問があって、虚構の可能性が推定される。第一に、最初から貸し倒れにして担保敷地を奪うことを狙っていた(貸金によって利子をかせぐことなど毛頭考えていなかった)ということであるならば、式部房は、当然領主に敷地を取り返され、かつ罪科に処せられることを予期しつつ、しかも長年月にわたってそれを未然に阻止し、当知行を全うしようと確信していたとみるほかない。なぜなら、地主となりえたことによって得られる利益(百姓のままであったら支払わねばならぬ地子金)が貸し倒れ金4貫文(元利とも)を越えるまでには、当時の地子金が間口尺別 40 文であったとして、最低2年の歳月を要するからである。一介の酒屋に過ぎない式部房にはたしてそれほどの実力が備わっていたかどうか、いかにも疑問に思われる。第二に、土御門家の訴えに対する幕府の裁定が下ったのは、約月の応永 12 年8月から数えて3年余り経過した応永 15 年 12 月 20 日であるが、しかし、錢主式部房が意図的に借金の返済を拒んだか否か、といった事実関係の認定にそれほどの時日を要するわけではないであろう(訴訟が約月に近ければ近いほど、認定はより容易かつ正確となる)。)

こうした事実を重くみるならば、状況はまったく違った相貌を示すことになる。すなわち、式部房が不正な手段を弄して敷地を奪ったとする土御門家の論拠は虚構で

あったと考える方が妥当であろう。換言するならば、担保敷地は用途借用状の文言に従って正当に錢主式部房の知行地となった、というのが真実であると考えられる。そして後になって担保流れの相伝敷地をぜがひでも請け戻したいと思った借主土御門家が、そのためのほとんど唯一の手段として担保流れの手続きに言い掛りをつけて訴訟に持ち込んだのであろう。しかし、やっと地主となりえた式部房が簡単に敷地を手放せるわけではなく、しかも権門を相手とする訴訟では不利な形勢にあったから、少なくとも既得の利益だけでも確保するため涙をのんで有力者と錢主契約を行ない、また次々と錢主を付け替えたりのしたのであろう。

その後、土御門家の土地請け戻し工作が失敗に終わったこと、しかし、錢主契約の結果、酒屋式部房が地主さらには百姓としての立場まで失ってしまったことは確かな事実である。永享6年(1434)においては問題の敷地の一つ正親町富小路西頬地の地主は、船越越中守であり、そしてこの年5月百姓は前項で言及した斉藤因幡守祐定とかわったことが次の史料により判明する。

(小)

正親町富小路西面御地、口四丈七尺七寸、奥へ拾丈陸尺預申候、御地子等尺別肆拾文宛分、如法例聊不可有無沙汰候、若御地子等緩急之儀候者、何時も可被立御地候、其時不可及是非候、御心得候て、可然之様被懸御意候者、可為恐悦候、委細者期面拝候、恐々謹言、

(永享六年)

五月九日

祐定(花押)

船越越中殿^{進之候²⁸⁾}

以上、不知行在所の発生事情を二つの場合について詳細に論及してきたが、その発生の契機はそれぞれ異なっていた。土御門家代々相伝の所領が領主の支配を離れ、地百姓の知行地となった、つまり「押領」されたのは、本来土地一地代を媒介項とする領主と百姓との関係に、一つは権門勢家の介入、また一つは金銭の貸借が生じたからであると考えられる。もちろんこれらが不知行在所の形成される契機のすべてではないであろうが、そこにはとりわけ重要とみるべき契機が含まれている。二つの契機のうち、借錢による担保敷地の「流失」・「押領」の場合は、当然領主にその責が帰せられるものであり、不知行在所となるのを阻止することも領主にとって可能である。しかるに権門勢家の介入によって百姓が敷地を「押領」した場合は、もはや領主には何ら手の施しようがなかった。すなわち泣き寝入りせざるを得なかったであろう。したがって領主の土地支配にとっては、権門勢家の介入を排除することこそが最大の問題であったに違いない。

不知行在所とはならなかったにしても、こうした問題はより大規模な形をとってしばしば発生し、土御門家を悩ませていたことを合せて指摘しておこう。

(有通)
土御門少将家雑掌謹言上
敷地之問事

在所 土御門面北頼一町，万里小路面土御門寄東頼半町
富小路面西頼以北一町，正親町面南頼東寄半町

右当敷地者，自具平親王以来至于今知行無相違者也，爰近日欲申給之仁有之由風聞之間，所驚存也，殊此敷地者依有
(足利義持)(足利義教)
大顔車之靈，勝定院・普広院殿様御代度々雖有望申之仁，于今被指置者也，所詮，任先例，為被棄捐他人之望，粗言上如件，

文安五年十月 日

(奥書)
「此敷地事，桃井欲申給云々，仍以菅二位，令申武家
(藤原重子) 大方殿，又以増位左京兆，示管領細川間，下知地奉
(勝元) 右京大夫

(摂津満親)
行之津方了，仍属無為，珍重々々，祖神応護也，」²⁰⁾

この土御門家雑掌申状案によれば，將軍義持・義教の代には個々の敷地ではなく，土御門四丁町自体を競望する人が何度も出現して危機に見舞われたというし，また文安5年(1448)，桃井某(幕府奉公衆か)がやはり土御門四丁町を望んだときは，土御門家では大方殿(義政母)や管領細川勝元を頼って競望を停止させるべく奔走しなければならなかった。このような敷地確保のための画策が功を奏するか否かは，ただひとえに土御門家と相手方との力関係にかかっていたからである。

3 土御門四丁町の形成課程

表一 住人と地割の変遷

I	II		III	IV	V				
康 応 以 前	応	永	永	享	宝	徳	宝徳 4. 5. 9.		
							間口(丈)	奥行(丈)	位 置
正 親 町 面10丈×10丈 万 里 小 路 面20丈×10丈 土御門家敷地10丈×10丈	康応1	松波量世	永享3	齊藤因幡守祐定			20.0	20.0	A
			[不 知 行 在 所]	文安2	疊屋三郎四郎		3.2	10.0	1
					右衛門五郎	宝徳3	2.0	10.0	2
	酒屋	応永25	酒屋	永享10	酒屋越前俊意		8.1	10.0	5
[万里小路面 間口11.1丈] [土御門面 間口10.0丈]				永享7	[被官人地]	宝徳1 桧皮屋彦三郎	1.7	10.0	6
				永享7		(宝徳1)	1.8	5.5	7
				[間口1.5丈] [奥行10丈]		[間口1.8丈] [奥行5.5丈]			
						(宝徳1)	1.4	2.0	8
					九郎二郎	宝徳1	2.1	2.0	9
							1.0	2.0	10
					宇足長賢	宝徳1	2.35	9.3	11
				(間口の異同—3.3丈と3.04丈—は東隣 地との境界線の形状によるものであろう)	衛門九郎	宝徳1	3.04	10.0	12
				永享7		[間口3.3丈] [奥行9.3丈]	4.0	10.0	16
		応永25		永享7			1.0	10.0	17
[富小路面 間口10丈] [土御門面 間口10丈]				永享7			5.0	10.0	18
				宮 敷 地			0.9	10.0	21
						奥行10丈 [土御門家跡敷地を取り込む]	7.15	11.0	24
						奥行10丈	5.3	11.0	25
		応永11		馬淵近江入道	宝徳3		1.9	11.3	26
		(間口3.7丈) (奥行10丈)	(隣地[C]の奥 地取り込む)	(間口3.7丈) (奥行11.3丈)	(欠地発生)	間口1.9丈	1.8	11.3	27
						間口1.8丈			
酒屋式部房	応永11	応永19	永享6	齊藤因幡守祐定			4.2	10.0	B
				[不 知 行 在 所]					
酒屋式部房	応永11	応永19	(奥地が隣地[26,27]に取り込まれる)	(旧に復する)			1.1	10.0	C
				[不 知 行 在 所]			3.7	10.0	30
		応永25		保寿庵	文安6	福聚寺宗薫	3.8	10.0	31
		[被 官 人 居 住 地]					7.6	7.5	32
康応1	土	御	門	家		[断 絶]			
(方一町) [東西20丈] [南北24丈]	[北西角10丈四方を欠く]					[跡地分割]	20.35	14.0	33

(注1.) 拙稿「室町期上京土御門四丁町の形態と構造」および本稿1, 2, 3節の検討結果にもとづいて作成したものである。

表—2 地口役免除丈数

年 代	内 容	万里小路面	土御門面	富小路面	正親町面	出 典
応永 25 年 (1418)	鴨 社 造 営 地 口 役	半 町	一 町	半 町	—	1531
同 上	同 上・酒 屋 分	11.1 丈	10 丈	—	—	1532
応永 26 年 (1419)	愛宕社造営地口役	半 町	—	—	—	1533
正長 2 年 (1429)	地 口 役	「土御門家境内百姓等」			—	1534
永享 7 年 (1435)	神祇官造営地口役	20.75 丈	7.5 丈	11.5 丈	—	1537
宝徳 3 年 (1451)	鴨 社 造 営 地 口 役	家門通路より 南半町	半 町	11.5 丈余	千丈余	1540

これまで明らかにしてきた諸事実を勘案して、あるいは大胆な推察を試みることによって、平安時代から室町時代に至る土御門四丁町の変遷を、その一斑だけであろうとも、概観することにした。

そのためには、別途に考察した宝徳 4 年 (1452) における土御門四丁町の実態を基礎として、それから数少ない史料を操作して逐次過去へと遡及していく方法しかないであろう。しかしながら、叙述の便宜上、ここでは検討結果(表—1)を逆に形成過程として把握しなおして記述を進めることにする。なお、地口役免除丈数一覧表(表—2)を主要参考資料として作成しておいた。

I 康応元年以前(図—1)

土御門四丁町は、元来条坊制の「町」(40 丈四方)の規模であったことは疑い得ない。平安時代、そこには「如法一町家」が営まれていたのであるが、しかし、おそらく土御門祖である定通(宝治元年(1247)没)の時代にその形姿を喪失した³⁰⁾と思われる。そして、土御門邸は規模を大幅に減じ、街区中央部に逼塞することになった。

鎌倉時代から南北朝時代にかけては、すでに述べたようにまったく史料を欠いているので、明確には何も語ることはできないが、おそらくはこの期間に土御門大路の一部が宅地化され、つまり巷所とされて土御門四丁町に取り込まれたのではなかろうか。土御門四丁町が東西約 40 丈・南北約 44 丈の規模となったのは、この鎌倉・南

北朝期のことであろうと想像される。

II 応永期(図—2)

康応元年(1389)7月、土御門四丁町は大きな変貌をよぎなくされた。日野資教がその被官松波量世に使用させる

ため、正親町万里小路角四半町(方 20 丈)敷地を借りうけたからである。このため、土御門家敷地は北西角 10 丈四方を欠くことになったが、ここには雑舎や井戸、また竹藪などがあった(前掲史料)。

応永 25 年(1418)の鴨社造営地口役免状にみえる免除対象地口「万里小路半町・土御門面壹町・富小路半町」が、前に指摘しておいたように不知行地ならびに被官人居住地を除くものであることを考えると、二、三の事実が明らかになる。「万里小路半町」とあるのは、松波量世の「押領」による不知行在所(半町)があることから当然であり、また「富小路半町」は、不知行在所が酒屋式部房の「押領」による 4 丈 2 尺のみであるならば、被官人居住地が間口合計約 19 丈存在することを示すとみてよい。「土御門面一町」は、もちろん不知行地や被官人居住地のないことを意味しているわけであるが、そのほかに、当時土御門面全長がすべて敷地間口として活用されていたことを示していることを指摘しておきたい。これは、土御門万里小路角と土御門富小路角の 2 つの敷地が 2 面とも地口とみなされるような規模・形態を有していたということである。具体的には図—2 のように推定されるのであるが、土御門万里小路角敷地については、同じ地口役の「万里小路面酒屋免案」に、

万里小路面 拾壹丈壹尺 土御門面分 拾丈
と記されていることから確証される。なお、「正親町面」に関する記載が欠けているのは、不知行地 2 筆(松波量

図—1 康応以前

図—2 応永期

図-3 永享期

世分 20 丈・酒屋式部房分 1.1 丈)を除く正親町面間口総丈数 7.5 丈 (=全長 40 丈—通路 1.4 丈—不知行地 21.1 丈—富小路路面奥行分 10 丈) がすべて被官人居住地であったことによるものであろう。

Ⅲ 永享期 (図-3)

永享 7 年 (1435) の神祇宮造営地口役免除のための敷地注文と、応永 25 年 (1418) の鴨社造営地口役免状とを比較すれば、土御門面の敷地利用に大きな変化のあったことが判明する。つまり、永享 7 年においては土御門面の万里小路角敷地および富小路角敷地は、土御門面にあった各 10 丈の地口を失っているのである。このことは、万里小路面、富小路面の間口がとくにその角部分において細分され、別の百姓に付けられたことを示しているとみなければならない。

万里小路面の酒屋越前俊意敷地が 3 丈減じて間口 8 丈 1 尺になっていることは、その地子銭請文から明白であり³¹⁾、その 3 丈は 2 等分されて、おそらくは土御門家被官の松皮屋近国などに預け置かれていたと推定される。すなわち、間口 11.1 丈の敷地は 8.1 丈・1.5 丈・1.5 丈の 3 つに分割されたのである。この事実は、万里小路面の地口合計 22.3 丈から土御門家被官人居住分 (松皮屋近国) の 1.5 丈を除いた地口 20.8 丈と、永享敷地注文の「万里小路面^{東端} 貳拾丈七尺五寸」とがほぼ一致することによって傍証されるであろう。

土御門富小路角敷地についても同様のことが言えるであろう。南端から順に 4 丈・1 丈・5 丈と分割されていたと考えられる。

次に、この敷地注文の各面丈数を調べると、第一に、正親町面が相変らずすべて「不知行并被官人居住之地」であったことが知られる。その内訳は、21.1 丈 (齊藤祐定分 20 丈・不明 1.1 丈) が不知行地、7.5 丈が被官人居住地 (おそらく保寿庵敷地、地子免除であろう) であったとみられる。第二に、富小路面について敷地注文

図-4 宝徳期

がわずか 11 丈 5 尺しか掲載していないことは、不知行在所が船越越中守の地 4.2 丈分のみであるならば、土御門家被官人の居住地が前よりふえて大部分を占めるようになっていたとみるほかないであろう。第三に、土御門面についても同様であって、不知行在所がないとするならば、約 2/3 を占める 12.5 丈分が土御門家被官人居住地として利用されていたとみなければならない。

被官人居住地の占める割合は、前代に比べて明らかに増大したといってよいであろう。

Ⅳ 宝徳期 (図-4)

宝徳 4 年 (1452) 5 月 9 日以前、すなわち土御門家支配最末期までの状況について述べる。

宝徳 3 年 (1451) の敷地注文の内容について前と同様に調べると、万里小路面と富小路面には何ら変化はない。しかしながら、正親町面には不知行地・被官人居住地でない間口 4 丈余の敷地が形成されていることが判明する (残る部分は福聚寺宗薫敷地であり、彼は地子を免除されていた)。また土御門面は永享 7 年の 7 丈 5 尺から半町へと大幅に変化しており、土御門面間口総丈数が約 4.5 丈増加したことを考慮しても、被官人居住地の減少は著しいと言ってよいであろう。

ところで、土御門面に増加した約 4.5 丈分の敷地とは、土御門面西端に近い辺に生成した極端に零細な規模の敷地群——間口 1.4 丈・2.1 丈・1.0 丈、奥行いずれも 2 丈——のことである。これらの敷地の形成は、土御門四丁町の各面がしだいに均質化する傾向を示すものであろうか。というのは、敷地間口を増加させるのが土御門家の利益 (地子収益) に直接結びつかないことは、土御門家の地子銭賦課が、別に検討したように実質的には面積当りで行われている³²⁾ 事実から明らかであり、したがってこうした零細敷地の出現は、百姓の意向を反映したものであっても、領主土御門家のそれではないと言

図—5 宝徳4年の土御門四丁町

うことができるからである。

なお、このような動きに関連して万里小路面南端敷地2筆の間口が、それぞれわずかであるけれど、拡張されたとみられることにも注意しておきたい。そしてこの2筆の旧境界線が、さきの零細敷地群の後背部の境界線として残存しているのである。

4 土御門四丁町の寄進——むすびにかえて——

さて、宝徳4年(1452)4月28日、土御門有通が21才で早逝した³³⁾。ここに土御門家の一流は断絶し、伝来の文書等の大半は勅納され、また家領は少納言五条為賢に与えられたようである³⁴⁾。しかし、この土御門四丁町敷地は、菩提をとむらってほしいという有通の遺志にしたがい、有通の父宗端が奏聞勅許を経て5月9日、大徳寺塔頭如意庵に寄進したのである。

土御門敷地寄進文書(敷地寄進状・寄進敷地指図・敷地相伝系図)³⁵⁾に「被准勅願之御寄進」とあり、またそれに付けられた同日付後花園天皇宸筆女房奉書に「へちしてくはうの御きしんにしゆむし候て」³⁶⁾とあるが、これは、天皇と将軍の寄進に准ずると権威付けることによって、如意庵への永続的な土地所有権の移転を保証しようとしたものであった³⁷⁾。

その後、大徳寺如意庵に対して、土御門四丁町敷地領有を安堵する幕府・朝廷の文書が相次いで発給された。5月13日には管領畠山持国下知状³⁸⁾、そして翌14日には後花園天皇論旨³⁹⁾が与えられている。前者が土御門四丁町敷地内に不知行在所のあること、つまり如意庵の一円知行地でないことをことさら注記している点を見落すことはできないが、ともかくも、幕府・朝廷の公認の下に、土御門四丁町は大徳寺塔頭如意庵の所領として新たな歩みを始めることになったのである。

注

- 1) 拙稿「室町期土御門四丁町の形態と構造」(『日本建築学会論文報告集』284号、昭和54年9月)。

- 2) 『大徳寺文書』1542。なお各人の官位・称号などの注記は引用に際して割愛した。
- 3) 『新訂増補 国史大系 第60巻上 尊卑分脈第三篇』所収。本稿の土御門家は村上源氏であり、陰陽家土御門家(安倍氏)とは異なることを注意しておきたい。両者の混同は『大徳寺文書』においてさえ認められるのである。
- 4) 前掲敷地相伝系図の注記、および「土御門家系図」(注3)。
- 5) 太田静六「平安末期における貴族の邸宅に就いて」(『日本建築学会論文報告集』45号、昭和27年10月)。
- 6) 『大徳寺文書』1542。編者はこの花押の主を撰津満親とするが、彼は宝徳4年2月29日に没している(『斉藤基恒日記』同日条)ので、その比定には疑点が生じる(問題の花押は満親の子元親であろうか)。
- 7) 同上、1531、1534。類似の表現は他にもみられる。
- 8) 同上、2662。
- 9) 同上、1907。
- 10) 地口銭については、馬田綾子「洛中の土地支配と地口銭」(『史林』60巻4号、昭和52年7月)参照。
- 11) 『大徳寺文書』1540。
- 12) 同上、1540。
- 13) 同上、1531。
- 14) この不知行在所について、難波田徹「室町期京都における土地問題の一考察——上京土御門四丁町を素材として——」(『立命館文学』267号、昭和42年9月)、脇田晴子「中世後期京都の土地所有について」(永原慶二編『戦国期の権力と社会』昭和51年、所収)などが言及しているが、土地所有の不安定さを示すための経過の概述にとどまり発生事情など十分な検討がなされていない。なお、脇田論文は正親町万里小路角の不知行在所については触れていない。
- 15) 『大徳寺文書』1912。
- 16) 同上、2401。
- 17) 後に引用する史料、文安5年10月付土御門少将家雑掌申状案(『大徳寺文書』2650)においても、同様の混同があり、その場合は、錯誤を明確に指摘することができる。
- 18) 『大徳寺文書』1535。
- 19) 永享10年8月11日付越前俊意請文(『大徳寺文書』2660)によると尺別50文。なお、不知行在所[B](地主は船越越中守である)では、永享6年5月9日付斎藤祐定請文(同、1536)によると尺別40文。
- 20) 同上、1539。仲介者というべき「りやうけうの御房」については不明。
- 21) 拙稿「室町期上京土御門四丁町の都市再開発」(『日本建築学会論文報告集』286号、昭和54年11月)。
- 22) 『大徳寺文書』1552。
- 23) 同上、1902。
- 24) 貸借関係の当事者が領主土御門家一百姓酒屋式部房であることは、脇田論文の指摘通りであって、難波田論文の理解は訂正されねばならない。
- 25) 『大徳寺文書』1903。
- 26) 同上、1904。
- 27) 難波田、脇田両氏とも百姓式部房が富樫被官人と称して所勤にしたがわなかったと解するが、それでは「以公人被打渡、致知行処、号富樫被官人、銭主不随所勤、今又畠山殿被官人山下銭主令契約、式部房無窮付銭主不随所勤」(傍点筆者)という文意が通じないであろうし、局面をとり違えるであろう。(なお、あえて付け加えるならば、「号富樫被官人」の後の読点は除いた方が理解しよいであろう。)
- 28) 『大徳寺文書』1536。
- 29) 同上、2650。
- 30) すでに知られているように、最後の「如法一町家」——徳大寺中納言邸——が焼失したのは、鎌倉時代初頭の嘉禎元年(1235)3月15日のことであった(『明月記』同日条)。

- 31) 『大徳寺文書』2660。
- 32) 拙稿(注1)。
- 33) 前掲土御門家敷地相伝指図(注2)。
- 34) 同「土御門家系図」(注3)。
- 35) 『大徳寺文書』1542。
- 36) 同上, 1543。
- 37) 実際にこの寄進の格付けが一定の意味をもったことは,

天文年間の如意庵と千秋晴季との相輪に際し, 幕府に対し土御門家へ敷地を返付するよう要請した天文7年3月20日付後奈良天皇女房奉書(『大徳寺文書』1557)が公方の御寄進に准ずる地であることを理由としていることにも窺うことができる。

- 38) 『大徳寺文書』1544。
- 39) 同上, 1545。

SYNOPSIS

U.D.C. : 72.03 : 72.011.2

URBAN DEVELOPEMENT OF TSUCHIMIKADO-SQUARE (KYOTO) IN THE MUROMACHI PERIOD

by YASUO TAKAHASHI, Kyoto Univ., Member of A.I.J.

Contents are mainly classified by four items as follows :

1. Tsuchimikado Family's inheritance and landowning of Tsuchimikado-Square.
2. A lot not to be under the control of the landowner ——troubles of the landowning——.
3. Formative process of urban space from the Heian Period down to the Muromachi Period.
4. Contributing Tsuchimikado-Square to Daitokuji-Temple.